

バンクーバー冬季五輪が開かれていた二月下旬。ポカポカ陽気の東京の昼飯時、恵比寿の蕎麦屋に入ったら、テレビの芸能番組でカーリングのルールを詳しく解説していた。中年のサラリーマン風の三人組がつかれるようにカーリング談義を始めた。

「日本はロシアに負けたんだろ」

「いや、ロシアには勝ったよ。スイスに負けた。勝っていれば面白くなったのに」

翌日の夜、東京は大塚の居酒屋。またもやカーリングの話が聞こえてきた。「北海道、青森、長野くらいでできないスポーツだな」といった具合。

東京でもこれだけの話題になっていたカーリング。試合時間が野球並みに長く、選手のテレビ露出度も濃くなる。競技の面白さといま一つ人々の印象に残りやすい。五輪が終わると忘れられるマイナー感がまだまだ否めないが、いろいろな意味で大きな可能性を持っているスポーツだ。

日本でカーリングが普及した原点は北海道にある。今回の日本女子チーム五人のうち四人が北海道出身。にもかかわらず、「チーム青森」であった。北海道はカーリングをお家芸にできた圧倒的なアドバンテージをみすみす逃し、今では青森県に完全にお株を奪われている。

◇ ◇

社団法人北方圏センターの季刊誌『Hokopoken』一三五号（二〇〇六年春季号、筆者は元職員の太田勇さん）によると、北海道でカーリング発祥の地は池田町だ。カナダ・ブリティッシュコロンビア州のペンティクトン市と一九七七年に姉妹提携し

青森県にお株を奪われたカーリング

たことがきっかけで、カナダ大使館から講師を招いて講習会を開いた。

七八年九月、第二回北方圏環境会議の準備のため、カナダ・アルバータ州（道と八〇年に姉妹提携）エドモントン市を訪れた当時の堂垣内尚弘知事はカーリング競技場を視察。実際にストーンを投げ、「これは面白い」と道内への普及を思いつく。道庁と北方圏センターが連携し、七九年にアルバータ州政府に指導者の派遣を要請。アルバータ州は世界カーリング選手権優勝チームの一員だったウォーリー・ウースリアク氏の派遣に加え、高価な用具一式を五〇人分寄贈すると返答してきた。

八〇年、北方圏センターと北海道カナダ協会が協力し、同氏を迎えて道内各地で講習会が始まった。八〇年は士別市、池田町、苫小牧市、八一年は釧路市、常呂町、網走市、八二年は札幌市、小清水町、稚内市、滝川市、帯広市、音別町と、八四年までの五年間で計一五〇〇人が参加。その後の指導者を生む機会となった。

八二年に第一回北海道カーリング選手権大会が開かれた。アルバータ州政府からは巨大な優勝杯が寄贈された。北海道と姉妹提携する中国・黒龍江省に北海道からカーリングのコーチを派遣し、中国（今回五輪で中国女子は銅メダル）が世界の強豪に育つことに貢献したおまけ話もある。

◇ ◇

北海道と深い縁で結びついたカーリングだが、道内の専用競技場は旧常呂町（現北見市）、名寄市、帯広市など五カ所にとどまる。人口約三〇〇〇万人のカナダでは一

二〇〇カ所あるという。九八年の長野冬季五輪からカーリングは五輪の正式種目に採用された。国際スポーツのヒノキ舞台上に北海道の出番が用意されたことになる。

しかし、北海道では熱心なリーダーがいた旧常呂町（現北見市）など一部を除き、カーリングを盛り上げる機運は停滞した。太田さんは「札幌市に専用のカーリング場がないことが痛手だった」と語る。地方で競技経験を積んだ若手選手が札幌で就職しても競技を続けられる環境にないからだ。

官民でバックアップ体制を築いたのが青森県。チーム青森の北海道出身選手四人のうち、大学生を除く三人は青森市役所やみちのく銀行、地元の学校法人に所属している。青森県カーリング協会のホームページの看板は「めざせカーリングの街」。意気込みが伝わってくる。老若男女が楽しめるスポーツという利点を生かして競技人口を増やし、競技場が整備されれば、国際大会の招致にもつながる。青森の先見の明勝ちだ。日本女子チームは今回、決勝進出はならなかったが、選手寿命の長い競技であることを考えると、有力選手を得た青森県が逆に握ったアドバンテージは大きい。

札幌市は新年度予算にカーリング場の設計費約四〇〇万円をやっと計上したが、太田さんは「競技場は複数必要」と注文する。大会ではチームの調整場が必要で、国際大会ともなると、諸外国の応援団は開催地でカーリングをプレーすることを楽しみにして来るという。青森県の背中はずます遠くなるかもしれない。

△希▽